2010年の楽壇、エピソードで振り返る　ザルツブルクから国内オペラまで

2010/12/21付|日本経済新聞　電子版

今年もあとわずか。ほぼ連日コンサートやオペラに通い、終演後のワインを楽しむ繰り返しの中にも「ドキッ」「ヒヤリ」「参った」とたじろく瞬間があった。通常の年間回顧に飽き足らない方々に向け、今回は、本年の私の事件簿10選を公開しよう――。

林康子がマクベス夫人役に67歳で初挑戦、大きな成功を収めた(9月19日、大田区民ホール「アプリコ」。撮影=蔵方周一)

2月は20日。高崎市の群馬音楽センターで、30年以上前の学生時代に音楽の師と仰いだモーシェ・アツモン（79）さん指揮する群馬交響楽団を聴いた。奥様を亡くされ、しょげていると思って遠出したら「新しいパートナー」を紹介され、あぜん。「50年来の友だちで家族ぐるみの付き合い。互いに配偶者に先立たれたので、残りの人生を『大家族』で過ごすことにした。孫は2人合わせて15人」とか。まずは、おめでたい話で、よかった。

4月は9日。リッカルド・ムーティ指揮で素晴らしい「カルミナ・ブラーナ」（オルフ作曲）を聴いた後、関係者でごった返す楽屋を避け、帰宅した。夏にザルツブルクでムーティさんに非礼をわびると「フルトヴェングラーいわく『楽屋に来た奴の顔はすぐ忘れるが、来なかった奴のことは長く覚えている』。どうだ！」と大笑いされた。

5月は12日。新日本フィルハーモニー交響楽団の記者会見で「旧日本フィルが分裂してから40年近くたち楽員も世代交代したのに弦の日本フィル、管の新日本フィルとの長短が温存されているのは、なぜ？」と質問した。コンサートマスターの崔文洙（チェ・ムンス）さんが答えた。「問題セクションも総入れ替えはせず、欠員補充で対応するから、せっかく良い奏者が入団しても、負の遺伝子にのみ込まれてしまうんです」。率直さに驚く。

6月は13日。日本フィルハーモニー交響楽団創立指揮者、渡邉暁雄さん没後20年記念演奏会のプログラム表紙に誤植を発見。母の国フィンランドの作曲家で、マエストロが生涯情熱を注いだシベリウスのつづりで「I」と「U」が入れ替わり「スベリウス」になってしまった。当日の指揮者、小林研一郎さんの演奏が「すべった」かどうかはノーコメント。

7月は15日。東京二期会「ファウストのごう罰」（ベルリオーズ作曲）初日で主役のソプラノ交代を栗林義信理事長（当時）が開演前、舞台上から告げた。20世紀後半の日本を代表する美声のバリトン歌手。「先生、ついでに歌いたくなったでしょ？」と幕あいに声をかけたら、「まあ、めっそうもございません」と、テノールのように甲高い地声で返された。

8月は4日。ザルツブルクのホテルで「インド式マッサージ『アーユルベーダ』の出張サービスあり」の札をみつけ予約。きっとインドに留学したオーストリア人だろうと早とちりしたら、施術室に現れたのは在住歴40年の本物のインド人男性。14世紀建造の石造りのホテルで日本人とインド人、ドイツ語で会話しつつのマッサージは、激しくシュール。

9月は19日。東京・蒲田の大田区民ホール「アプリコ」で大田区民オペラ協議会がヴェルディの「マクベス」を上演。世界の一流劇場で主役を張ったベテラン、林康子（ソプラノ）さんがレディー（夫人）役に67歳で初の挑戦。鋭い眼力、輝かしく個性的な声の健在に圧倒された。

10月は25日。スター街道から外れて久しいドイツ人指揮者、ベルンハルト・クレー（74）が東京都交響楽団へ客演、サントリーホールでブルックナーの「交響曲第4番『ロマンティック』」を振る晩が早々に売り切れた。客席の平均年齢はいつもより10歳は上。絶えず新鮮な響きを探る演奏に盛大な拍手が続き、隠れた「良い聴衆」の出現に目をみはる。

11月は22日。マリス・ヤンソンス指揮ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団がマーラー「交響曲第3番」をサントリーホールで演奏する際、日本の合唱団の立ち位置をオルガン下で指揮者と向き合う「P席」に変えたため、すでにチケットを購入した観客を取材席に誘導。代わりに各紙音楽担当記者がP席の合唱団後方に並び、マエストロの棒に酔った。

12月は（まだ先だが）31日。80歳のロリン・マゼールが東京文化会館で「岩城宏之メモリアル・オーケストラ」を指揮、ベートーヴェン「交響曲全9曲」の演奏に午後1時から、約11時間がかりで挑む。かつてロンドンのフィルハーモニア管弦楽団と

1日半で演奏、「ギネス・ブック」に載った記録を「大みそか1日」の岩城に破られて以来、リベンジの機会を狙ってきた。篠崎史紀がコンサートマスターを務めるオーケストラはまさに、岩城のギネスのパートナー。4年前に亡くなった岩城もさぞ、天界で苦笑いすることだろう。

（編集委員　池田卓夫）

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.